特279
特279-14
1200501131801
4

考古圖集

始

考古圖集解說　第十二集

伊豆三島神社國寶蒔繪手箱

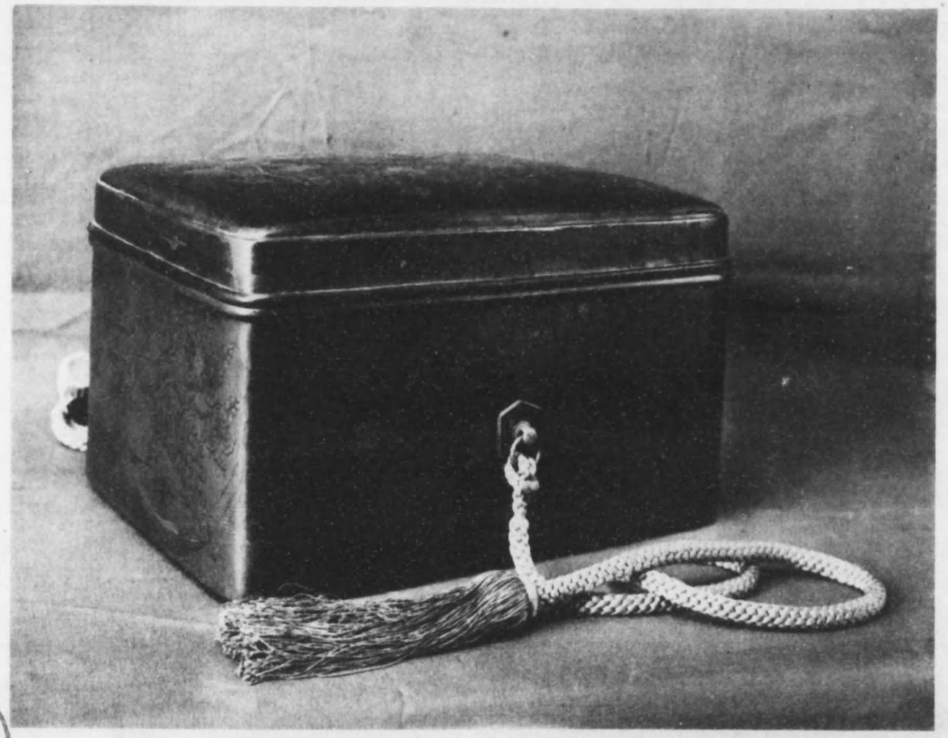
蒔繪は鎌倉時代に入りて一變化を來たせしは、人の說くところ、而して當代の遺品の優なるものにして、その變化のあとを明かに見るに足るものは、一二にして止まらざるべしと雖も、伊豆三島神社に藏せらるゝ手箱の如きは、其の代表的優作の一となすも誤に非ざるべし。

手箱は二重懸子付錫覆輪ある胴張形にして、横一尺五分・幅七寸五分・高五寸七分。（一一一）今其の製作文樣等を概述すべし。蓋甲（一一二）の文樣は梅樹池塘に立ち微風水面を搖がす、水禽群遊して唐歌繪を配す。蓋見返し（一一三）には、青松枝を交へて土坡の上にあり、水禽等しく遊べり。側面には飛禽のみを描き、緣は錫を以て覆輪こせり。蓋の高さ五寸。仕樣を見るに地は常地にして平目粉を交へ、土坡は小判蒔ボカシ、水は付書、梅花及び文字は銀金貝、八重梅は粉蒔、水禽は付書。すべて書割は筆意を現し、花の地塗の如きは筆を圓狀に廻して一度に塗抹し、敢て筆致の濃淡を意こせず、仕立方至て疎笨なり、然れども土坡及び粉地の如きは常地に先きに及び小三平目位のものを粗雜に蒔き、之を巧妙に研磨せり。又流水の描寫は筆勢極めて强く、潺湲の狀活動するが如し。特に用意周到なるは、土坡の頭を小判粉を以て巧みに蒔きボカシたるにあり、而して本蒔繪に於いて最も注意すべきは、水禽梅樹等を現はすに、少し下地を用ゐて蒔繪を施したるを以て、後世の高蒔繪の如くに見ゆるが如き事なりとす。身は高さ四寸五分、その兩側面は（一一一）（一一四）の兩圖版に之を見るべく、內側は（一一四）に一部を示せり。其の文樣の趣向略ゝ蓋の表面に似たり。圖版に見る紐は後世補修せるもの、當初のものは黃白打違に梅鉢紋を染めたる平打なりしが如く、身の內側は今は黑漆地に薄き梨地をなせるのみなるも、當初は綠色の錦を其の上に張りしが如く思はる。身底裏は黑漆薄梨地、緣は錫覆輪。懸子は二重あり、今其の上部のものゝみを示せり（一一五）。底表は蓋裏と圖樣の相對せるもの、黑漆薄梨地に土坡と松とを現はし、水禽群れて飛べり。內側・外側亦之に相對せるもの、底裏は身裏と同じく黑漆薄梨地のみなり。外側面のみに文樣あり、他はすべて黑漆薄梨地のみなり。懸子には、鏡一面・鏡匣一合・小筥四合・丈長二折・銀器水入一個・鑷子一個・鋏一個・髮搔一本・針筒一本・白粉筆一本・櫛二十個等の具足品を容る。鏡（一一七）は梅樹に雙雀を配せるもの、徑三寸七分八厘、緣直角式にして高さ二分五厘强、

白銅製。分厚くかつ圖樣に盛上けの多きは所謂注文品なるが爲なるべく、所謂時代色のなくして鑄造當時の儘の如き色を保てるは、紀伊熊野新宮神寶の手箱に收めたる鏡と全く同趣なり。鏡匣（一一六）は徑四寸一分、蓋甲は梨地にて手箱蓋甲と同趣の圖樣を描き、蓋の見返しは黑漆薄梨地にて、池塘と水禽とを現はし、身の底また之と趣を同じうせり。圖版は蓋甲と身底を示せり。身の內側には、手箱の身の如くに錦を張りたり。銀製水入（一一七）は蓮華を現はせるものなるべく、內底に金を塗つて蓼を作れり。高一寸七分、口徑三寸。（一一八）に示せる小筥は、薰物・白粉・齒黑等を容れしものなるべし。櫛（一一九）は今存するもの二十枚に過ぎざるも、熊野新宮の手箱の中に收められし櫛は、すべて二十九枚宛ありしに徵すれば、本手箱のもの亦或はもと二十九枚ありしものか。螺鈿にて梅花を現はせり。外に解櫛一個あり。丈長（一一九）は丈長紙にて作り、金、銀にて霞に梅花を描けり。長五寸。（一二〇）に收めたるものを見るに、鋏は銀製にして金を以て梅花を描けり。長四寸一分。毛拔（鑷子）も亦同製、長二寸二分。鋏の上に置けるは髮搔か。長五寸七分。其の上は白粉筆にして長五寸四分。左上は銀簪の殘片なり。その下は針筒か。長四寸。是等も亦銀製にして金を以て梅花を描く。以上を通じて見るに、梅花を以て其の文樣を一貫せり。想ふに本蒔繪の意匠の如きは、當代の好尙たりし牧歌的情緖を表現せんとする風の寫されしを見るべく、藤原時代のものに比して稍〻繁冗の感あるも、優美を失はず。

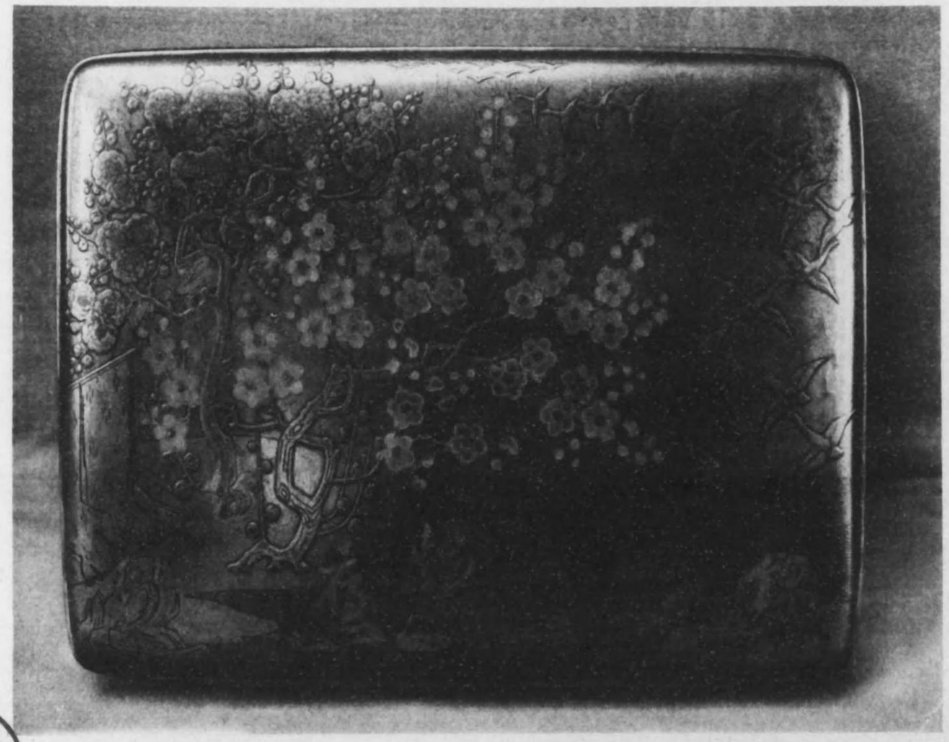
本手箱が漆工史の上に於いて重んぜらるゝ所以は、單に其の製作・圖樣の精巧なるのみに非ず、其の手法に於いて高蒔繪の濫觴たるべく思惟せらるゝにあり。高蒔繪の盛行は足利時代中期以後にあるも、南北朝時代と推定すべき紀伊熊野新宮神寶の手箱のには既に高蒔繪の施されたるを見る。しからば、よしや後世の高蒔繪とは手法の異なるものあるも、是を以て高蒔繪の濫觴たりと論ぜられたる故黑川眞頼先生の高說は、直ちに之を認容すべきものたらん。而して鎌倉時代に入つて高蒔繪の手法の工夫を見しは、文樣表現の好尙に多少の變化のありしを一因とすべきも、金銀製粉術の進步が齎らせしものゝ大なりしを察せざるべからず。

此の手箱、傳へて平政子の獻ぜしところといふ。源頼朝が神佛崇拜の志深きは人の知るところ、殊に三島神社は、伊豆貶謫の間彼の參拜祈願を忘らざりしところなり。しからば前述の如く文樣・手法の上よりして、鎌倉時代とする推定に大なる誤のなしとせば、本蒔繪を傳の如くに政子の獻ぜしものとなすも可ならんか。



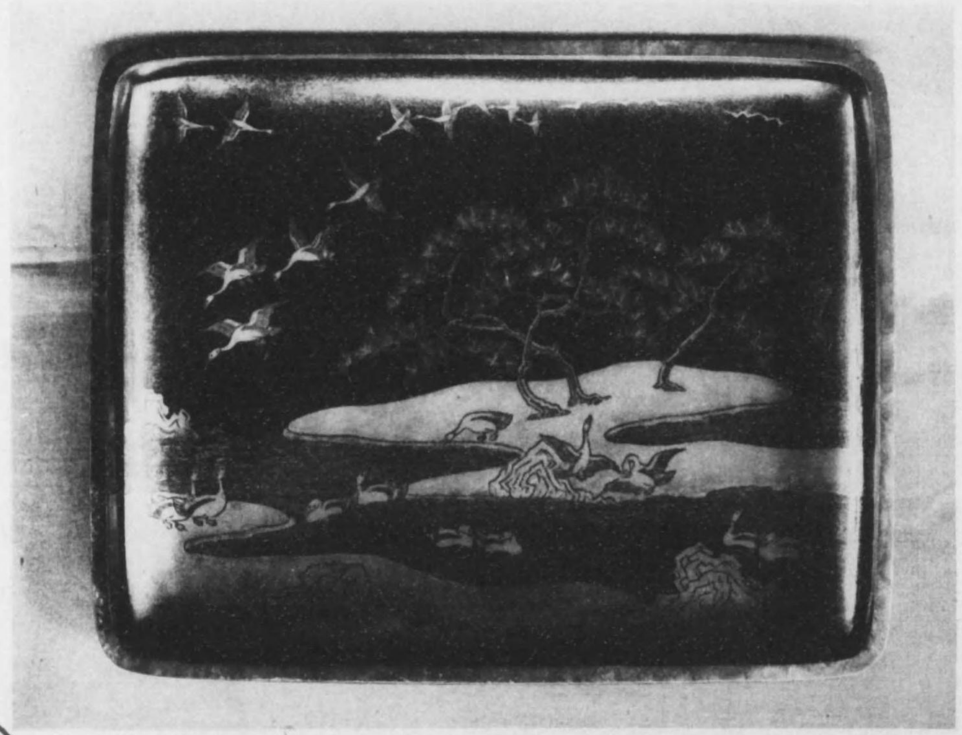
箱　　手

（甲　蓋）

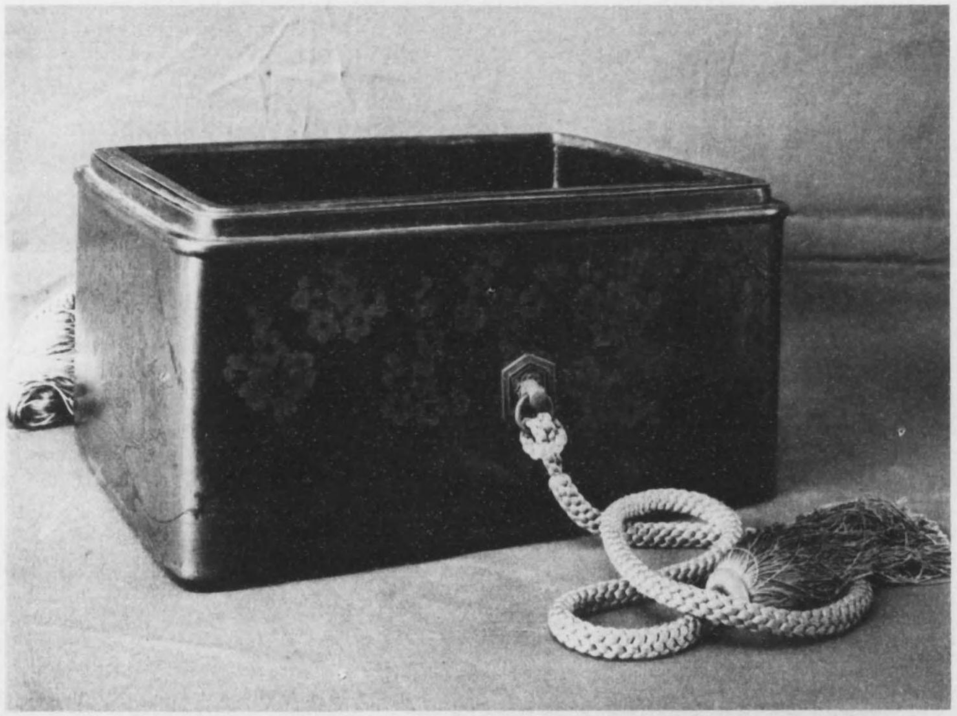


箱　　手

（返見蓋）

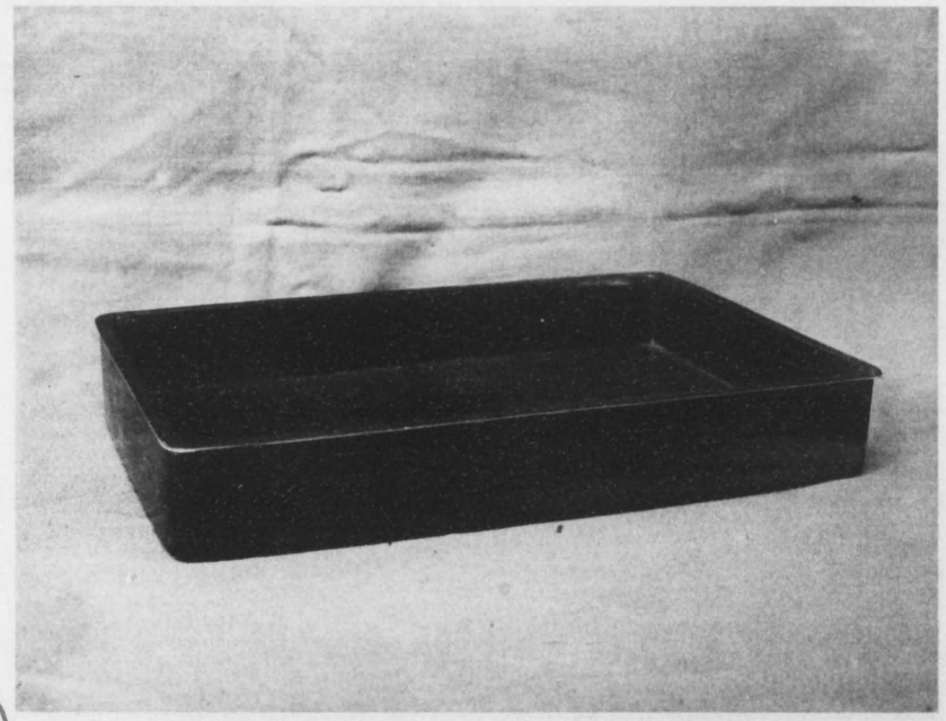


箱　　手
（身）



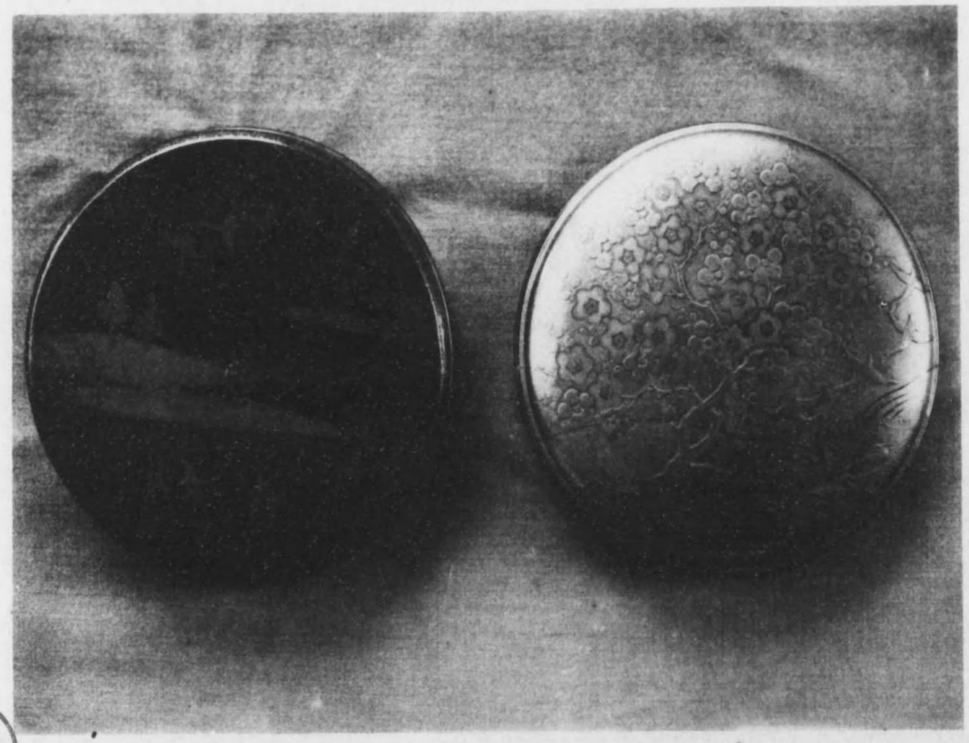
箱手

（子　慰）



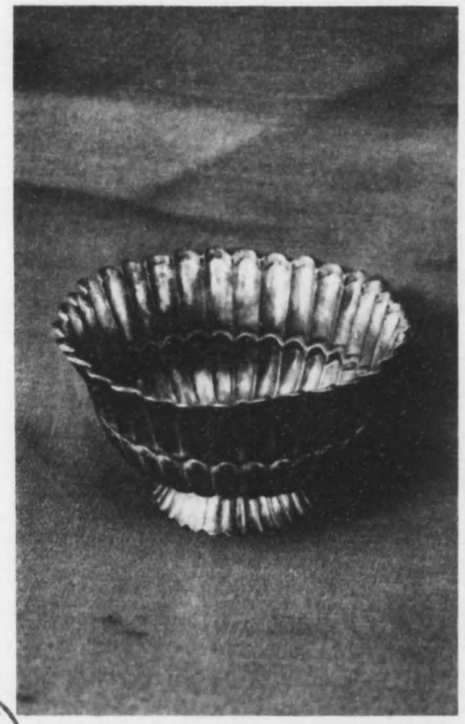
箱　　子

（身匣鏡及蓋匣鏡）



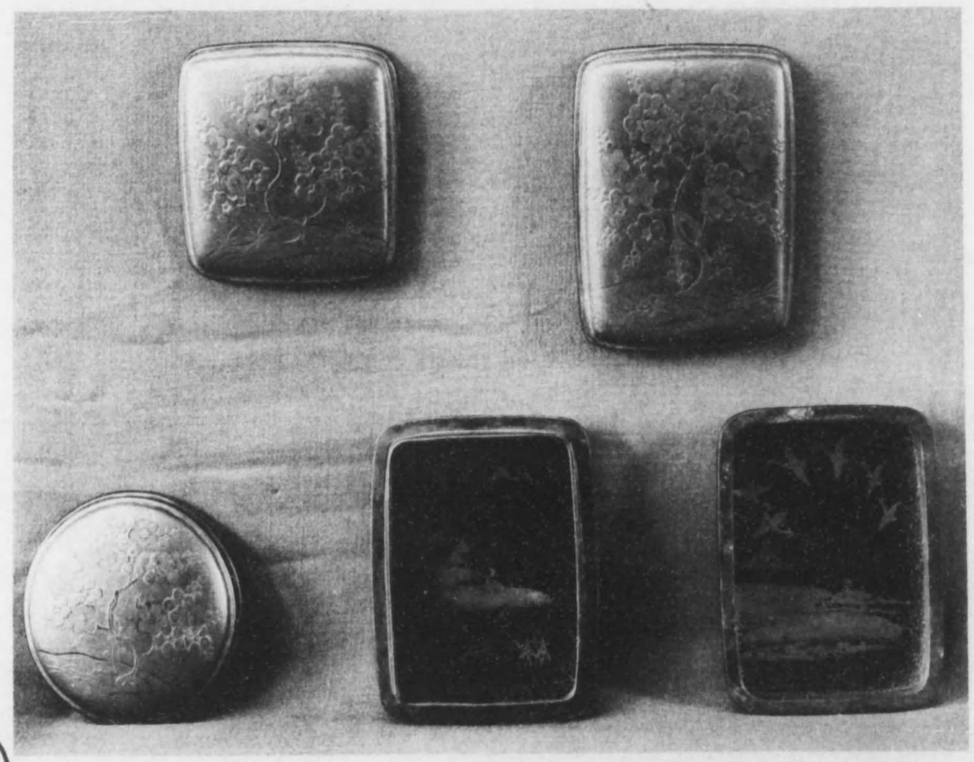
箱手

（入水及鏡）



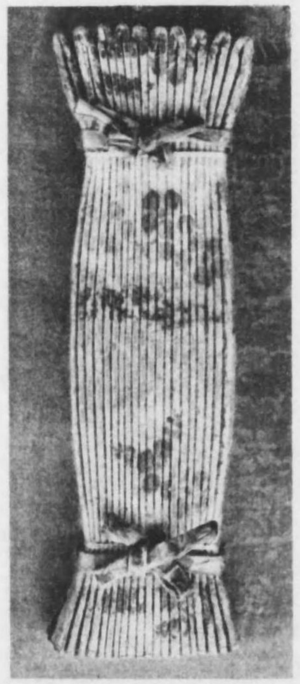
箱　手

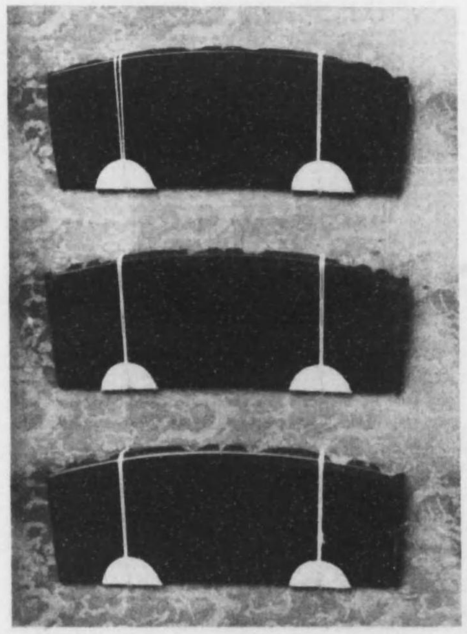
（筥　小）

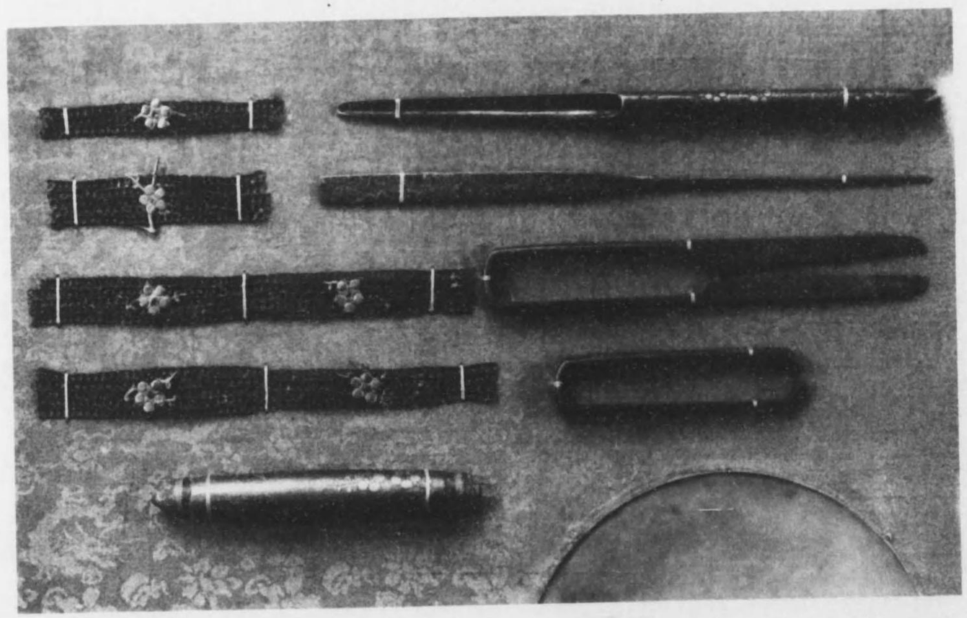


箭　　手

（長丈及櫛）







終